

# アミーゴ会だより

2025年1月  
通巻第61号  
季刊 2025-I

[www.mex-jpn-amigo.org](http://www.mex-jpn-amigo.org)



発行人：河嶋正之  
編集人：河嶋正之  
事務局：吉野 隆

## メルバ・プリーア大使から メキシコ・日本アミーゴ会によせての 新年祝賀メッセージ




メルバ・プリーア大使

2025年1月  
東京にて

2024年は私たちににとって挑戦と新たな課題への年であり、その中で目標を達成し、新たなスタートを切ることが出来ました。新しい年を始めるにあたり、私たちの絆を一層強固なものにするため、熱意をもって未来に目を向けていきたいと思えます。

私は駐日メキシコ大使として、両国の友好と協力関係を促進するため、引き続きアミーゴ会と共に活動できることを光榮に思います。メキシコと日本は文化的にもコミュニティーでも強い絆で結ばれており、私たちは可能性のあるすべての分野において、相互理解を強め、協力の架け橋となるべく共に歩み続けてまいりたい所存です。

 **México**  
Embajada de México en Japón




Mensaje de Año Nuevo de la Embajadora Melba Pría para la Asociación "Amigo-Kai"


Tokio, Japón, enero de 2025

2024 fue un año de oportunidades y desafíos, con objetivos cumplidos y nuevos comienzos. Al iniciar este nuevo año, miramos hacia el futuro con entusiasmo y ánimos renovados para fortalecer los lazos que nos unen.

Como Embajadora de México en Japón, me honra continuar trabajando junto a la Asociación Amigo-Kai para promover la amistad y la colaboración entre nuestras dos naciones. México y Japón comparten sólidos vínculos culturales y comunitarios, y juntos seguiremos construyendo puentes que favorezcan el entendimiento mutuo y la cooperación en todos los ámbitos posibles.

Que este Año Nuevo nos inspire a seguir avanzando unidos, con el firme compromiso de trabajar en favor de la paz y la prosperidad de nuestras sociedades.

Atentamente,  
  
Melba Pría  
Embajadora

 Felipe Carrillo  
PUERTO

2-15-1 Nagata-cho, Chiyoda-ku, Tokio 〒100-0014 | 東京都千代田区永田町 2-15-1 | Tel.: +(81-3) 3581-1131 | infojpn@sre.gob.mx |

新しい年を迎えることで、私たちの社会の平和と繁栄のため、固い意志を持って共に前進するきっかけになることを願っています。

メルバ・プリーア / 駐日メキシコ大使

(メキシコ大使館訳)

### = 目次 =

1. 新年祝賀メッセージ	駐日メキシコ大使	メルバ・プリーア	...1
2. 新年のご挨拶	アミーゴ会	会長 河嶋正之	...2
3. 第3回講演会報告：「マヤ人の日常ーマヤ文明を理解するためのさらなる一歩」	金沢大学准教授	市川 彰	...3
4. メキシコへの誘い：「ぶらりメキシコー人旅 14ー古都 Cholula」	会員	阿部修二	...6
5. アミーゴ会活動報告：「第23回フィエスタ・メヒカーナ in お台場」	実行委員会委員長	三村秀次郎	...9
6. メキシコ短信：「世界10位の経済大国：プラン・メヒコ発表」「大統領への高い期待続く」	/	あとがき	...6

# 新年のご挨拶

メキシコ・日本アミーゴ会  
会長 河嶋正之



謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

会員の皆さんにおかれてはお健やかに初春をお迎えになられたこととお喜び申し上げます。本年が素晴らしい一年となることを祈念します。

メキシコ・日本アミーゴ会の活動は2024年度も感染症予防の観点から抑制的でしたが、新年は諸般の対面活動にも取り組みたく存じます。

さて、2024年会員総会は3月にメール方式で議決権行使投票を行い、2023年度事業報告・決算、2024年度事業計画・予算が承認され、3月22日付けでご会員に報告しました（本誌第58号参照）。会報「アミーゴ会だより」は会則通り年4回発行を継続し、会員のご投稿やメキシコ歴史文化講演会講師のご寄稿を掲載しました。また、メキシコ史上初の女性大統領が誕生した大統領選挙など折々の政治動向、メキシコ関連の書籍や催事の紹介など、多様な記事を各号に取り纏め掲載しました。メルマガではメキシコ大使館や会員などから提供された各種催事情報を会員に配信しました。

メキシコ歴史文化講演会は、日墨外交関係樹立135周年記念事業として2023～24年にかけて東京・福岡・大阪で巡回開催された「特別展：古代メキシコマヤ、アステカ、テオティワカン」のテーマにあわせ、またコロナ禍の落ち着きも踏まえて、各文明の研究者を講師に迎えて全3回の講演会を4年ぶりに実施しました。第1回講演会は3月21日に「アステカ王国の実像と宗教観」を専修大学の井上幸孝教授に、第2回は4月11日に「テオティワカンの研究成果と課題」を岡山大学の千葉裕太特任助教に、エスピオ・メヒカーナを会場にお願いしました。第3回は5月7日に「マヤ人の日常・マヤ文明を理解する次なる一歩」を金沢大学の市川彰准教授にメキシコからZoomで講演いただきました。各講師のレジュメは本誌第59-60-61号に掲載済みです。

本年のメキシコ歴史文化講演会は、徳川家康の外交顧問を務めた英国人航海士ウィリアム・アダムズ（三浦按針）を巡る多彩な日墨・日欧関係を主題に開催準備を進めています。ご期待ください。

第24回フィエスタ・メヒカーナが9月14日～16日に東京お台場で開催され、メキシコと日本との絆を深める取り組みの一環として本会は例年同様に本事業を後援しました。開会式では会長が、近現代の日本にとりメキシコは大切な“最初の国”、すなわち、初の平等条約締結国（1888年日墨修好通商条約）・初の日本人移民受け入れ国（1897年榎本殖民団）・初の経済連携協定締結国（2004年EPA）だと重ねて来場者に紹介し、両国は重要な友好国であると強調しました。毎年恒例のEl Grito（独立の叫び）の行事も、日本在住メキシコ人の皆さんが大勢参加してお台場で再現されました（本誌第61号参照）。

懇親ゴルフ大会は当初の8月29日を荒天で急遽中止し、12月8日に無事開催できました。幹事会は大阪大学東京事務所です。1・5・9月の年3回対面開催し、柳沼孝一郎さんを新幹事に選任しました（正式就任は総会案件）。

メキシコ・日本アミーゴ会はメキシコ大好き人間の親睦と両国の友好親善の増進を目的とする、ボランティア活動団体です。アミーゴ会員には引き続きメルマガで多種多様なメキシコ関係催事をご案内するとともに、会報「アミーゴ会だより」を継続発行し、アミーゴ会HPとあわせて会員相互の拠り所といたく存じます。今後とも会員の皆さまの積極果敢な事業提案と活動参画とを期待します。

メキシコではシェインバウム政権が国民の高い期待を背負って10月1日に発足し、MORENA（国家再生運動）流儀の“新生メキシコづくり”が持続します。他方、隣国の米国では1月20日にトランプ2.0共和党政権が発足し、国際政治経済分野での予断を許さない政策展開が予測されます。メキシコはUSMCA（T-MEC：墨米加三カ国協定）締結国であるといえども、官民ともに難しい舵取りを迫られそうです。

最後に、2025年の干支は「乙巳（きのと・み）」で、「乙」は発展途上の状態を、「巳」は脱皮して最大限成長した状態を象徴するとか。今までの努力や準備が実を結ぶ時期＝成長と結実の時期とのことです。しかし、地球では人類が叡知と努力で営々と築いてきた結晶が壊され、理不尽で非人道的な出来事が継起しています。平和と安寧の日々が一日も早くもたらされ、成長と結実の一年になることを念願します。（了）

## マヤ人の日常 ～マヤ文明を理解するためのさらなる一歩～

金沢大学 古代文明・文化資源学研究所  
准教授 市川 彰

### はじめに



特別展「古代メキシコマヤ、アステカ、テオティワカン」は、2023年6月に東京国立博物館を皮切りに、九州国立博物館、大阪の国立国際美術館にて約1年にわたって開催された。展示物のメインのひとつでもあるパレンケ遺跡出土の赤の女王を連想させる赤を背景とした当特別展のウェブサイトはとてもインパクトがあり、多くの人々の興味関心をひいたことであろう。そのようななか、特別展に関連するメキシコ歴史文化講演会が3回にわたり実施され、そのうちのひとつ、マヤ文明の回を筆者が担当した。しかし、発表日に筆者はメキシコのオアハカ州プエルト・エスコンディード市の近くで考古学調査を実施中であったため、リモートでの発表となった。講演会では、現在調査をおこなっているオアハカ州のデータではなく、コロナ禍以前に中心的に調査をおこなっていたマヤ南東周縁地域、現在のエルサルバドルの知見や成果をもとに発表させていただいた。

発表で扱ったテーマは、特別展を意識したうえで、あえて「マヤ人の日常」とした。今回展示された赤の女王をはじめ、マヤ、アステカ、テオティワカンの一般的なイメージといえば、やはり煌びやかなヒスイ製品を身にまとった王や貴族、荘厳なピラミッドや大型の石造記念物であろう。筆者である私もそうした為政者の姿や文化に魅了されて、考古学を志した一人でもある。しかしながら、そうした王や貴族を支えた／に仕えた庶民、つまり私たちのような市井の人々は古代の世界においてはどのような生活を送っていたのだろうか。これは、私が日々調査や研究をしながら考えるようになってきた点でもある。王や貴族の研究も面白いけれども、庶民も研究してこそ、古代社会を総合的に理解することにつながるはずである。現在から数千年後の考古学者が、日本社会全体を東京中心部の豪邸を調査しただけで理解できないのと同じである。そのような意図から、王や貴族に関する話を期待されていた方には大変申し訳ないが、今回はあえて特別展とは大きく異なる内容で発表をさせていただいた。ご理解いただければ幸いです。

### マヤ人の水管理・農耕・森林管理

講演会では、最初にマヤ人の「水」事情について説明した。洋の東西、時代の新旧を問わず、水は人間を含む地球上の生物全てに重要といっても過言ではない。マヤ低地では乾期になると雨が降らない。しかし、年間降雨量は、調べてみると約1350～3700mmもある。毎日が曇り空で雨の印象が強い金沢が約2400mmであることを考えると、けっこうな雨量である。問題は、雨の降らない乾期が長引いたり、雨が少ない年に人々がどのように水を管理したかである。マヤ人たちは、周辺にある中小河川や湖、バホと呼ばれる自然のくぼ地、セノーテと呼ばれる泉だけではなく、水路を作ったり、人工的な貯水池を大々的に作ることでこれに対応してきた。

さらに貯水池では蓮の花を栽培し、その大きな葉で水面を覆うことで、水中への光を遮断し、藻や蚊の発生を防止し、水を清潔に保つ工夫がなされていたという。そして、こうした水を確保・管理することも為政者の権力につながったとも言われている。

雨期は、農耕の季節でもあった。グアテマラ南部（マヤ南部高地）やペテン県（マヤ低地南部）は、現在でも自然が豊かである。雨が降り始めると、一気に一面が緑となり、先スペイン期から主食であったトウモロコシが勢いよく成長する（写真1）。エルサルバドルでは、こうした植物を栽培していたとされる畝状遺構が多数見つかっている。鉄器を使わなかったにもかかわらず、規則



写真1：現在のトウモロコシ畑（筆者撮影）

正しく作られた畝は見事としか言いようがない。その一方で、後述するホヤ・デ・セレン遺跡の事例に基づくならば、トウモロコシ以外にキャッサバも栽培されていたことはあまり知られていない。キャッサバは自然環境が悪くても育つ植物である。当時からトウモロコシの不作などに備えて、リスクマネジメントをしていたことがうかがえる。

リスクマネジメントという観点から、森林管理についても見てみよう。マヤ文明の人々は、農地を豊かにするために森林を切り開き焼き畑をおこなっていたとされる。伐採された木材は、家屋、日常什器、薪としてだけではなく、マヤ文明の神殿ピラミッドを覆った漆喰や人体バランスの維持に必要な塩の生産にも欠かせないものであった。そのため、人口増加にともなって森林伐採が行き過ぎたことで、古典期終末期（紀元後 800～1000 年頃）に起きたマヤ低地南部諸都市の衰退や崩壊がもたらされたという指摘もある。しかし、最近ではこうした焼畑、漆喰や塩生産に従事していた人々が、水場近くにはえて生育の早い木材を選択する、また燃焼効率の良い窯を開発するなど、やみくもに生活環境周辺にある森林を切り開いていたわけではないこともわかってきている。

古典期終末期以降の後古典期にもマヤ低地北部やマヤ高地で活発な建設活動を含む人間活動が認められる。このことに鑑みれば、ある王朝や都市あるいは王や貴族を中心とする文化が衰退・崩壊したとしても、その他大勢の人々はその時々々の自然環境や社会状況を把握しながら社会体制や生活様式を臨機応変に再編しながら住み続けていたのだろう。

### ホヤ・デ・セレン遺跡

マヤ人の日常生活がよくわかる遺跡に、エルサルバドル共和国中央部に位置するホヤ・デ・セレン遺跡がある。この遺跡は、「中米のポンペイ」とも呼ばれているとおり、紀元後 7 世紀中頃に起きた火山によって埋没した集落遺跡である。

集落には、土で造られた住居、炊事場、倉庫などに加え、蒸し風呂や宗教的な機能を持っていたと考えられる建造物群があったと考えられている。ほぼ完全な状態で出土した蒸し風呂があり（写真 2）、その近くには平石が立位の状態で並べられている。この平石を背もたれにして、蒸し風呂に入るための順番待ち、あるいは談笑用でもしていたのだろうか。占いをおこなっていたとされる建造物もあった。その他、集落のはずれにはマヤの諸都市間を繋げていたとされるサクベ（堤道）が白色火山灰で造られ、住居と倉庫の間や周辺の空き地には家庭菜園用と思われる畝が広がっていた。ホヤ・デ・セレン遺跡の調査では、収穫前のトウモロコシ、上述したキャッサバの形そのものが石膏によって復元されている。それぞれの作物は柵に囲まれ



写真 2：ホヤ・デ・セレン遺跡の蒸し風呂  
（一番奥の建造物。筆者撮影）

た別々の畑で栽培されていた。そのほか、マメ類、カボチャ、トウガラシ、カカオ、リュウゼツランなどをはじめとする多様な植物を食していたか、飲料もしくは服飾用として利用していたようである。動物としてはアヒル、シカ、そしてイヌを食べていたようだ。

庶民といえ、さまざまな器物や希少な工芸品を所有していたこともわかっている。遺跡では、貯蔵や食事を盛るために使われた日常什器だけではなく、多彩色土器や香炉型土器が見つかることがその証拠である（写真 3）。また遠距離交易によってもたらされる



写真 3：ホヤ・デ・セレン遺跡出土の多彩色土器  
（筆者撮影）

黒曜石、装飾品として重要であったヒスイ製品も、わずかではあるが確認されている。

このように庶民は、地域内の為政者や地域外の人々ともつながり、相互交渉をしながら生活を営んでいたことがわかっている。逆説的にいえば、時の為政者たちはこうした庶民とつながっているからこそ為政者なのであり、庶民の実態を明らかにすることが為政者の実態、そして古代社会の総合的な理解へとつながるのである。さらには、そもそも庶民と為政者というカテゴリが存在していたのだろうか、物質文化に見られる差異は何を示すのか、それは社会的な何かの不均衡や不平等を示すのか、富とは何か、人々は幸せだったのか、などなど古代社会のみならず、人間社会の根源的な部分を考えるきっかけを与えてくれるのである。

### おわりに

最後に、考古学的に復元できる生活だけではなく、考古学的にアプローチしにくい側面にも筆者は興味を

もっている。例えば、皆さんが日々生活のなかで感じたりする匂い／臭い、食事の味、生活の音、家の中での様子、歩く・走る・造るなどの日々の動作、雨風などの自然現象への認識などである。いずれも普段の生活では当たり前すぎて考えることはないかもしれないが、ふとしたときにマヤの人々にとってトウモロコシはおいしかったのだろうか、都市や町の近所づきあいほどのようなものであったのか、森の中を歩いていた時どんなことを感じていたのか、どんな音楽や音がながれていたのか、どうやって寝ていたのか、雨は喜び

の雨だったのか、人を愛するとはどういうことだったのか、家族って何だったのか、世界とは何だったのか、などさまざまな疑問がわいてくる。ただし、そもそも今と昔では考え方が違うので、問いの立て方自体が間違っているかもしれない。とはいえ、自分たちの現在の生活や考え方と照らし合わせて、こんなことを時々想像してみるのも楽しいものである。こうした日々のふとした営みの蓄積が、王や貴族だけではない古代文明イメージにもつながることを切に願っている。(了)

### 2024年メキシコ歴史文化講演会(全3回)の概要

『特別展 古代メキシコ—マヤ、アステカ、テオティワカン』(東京・福岡・大阪)に因むテーマで研究者をお招きし、古代メキシコ文明の実像に迫る連続講演会を、第1回と第2回はメキシコ大使館別館5階で対面開催しました。第3回は本会初の試みとして、オンラインでメキシコ現地調査中の講師とを結び開催しました。

第1回(3月21日)「アステカ王国：歴史の実像と宗教観を探る」 専修大学教授 井上幸孝氏

第2回(4月11日)「テオティワカン：最新の研究動向とさらなる謎への挑戦」 岡山大学特任助教 千葉裕太氏

第3回(5月07日)「マヤ人の日常：マヤ文明を理解するためのさらなる一歩」 金沢大学准教授 市川彰氏

各講師には後日、主な論点 and/or 追加論点などをご寄稿いただき、第1回の井上先生のご投稿は本誌第59号に掲載済。第2回の千葉先生のご投稿は第60号に掲載済。第3回の市川先生のご投稿は本号に掲載しました。

\*\*\*\*\*

### メキシコ短信 「GDP世界第10位の経済大国になる」：プラン・メヒコを発表

シェインバウム大統領は昨年10月1日に初の女性大統領として就任し、1月13日には新経済政策大綱「メキシコ計画(Plan México)」を公表した。大統領は2030年の任期満了時には、メキシコを現在のGDP世界第12位から第10位の経済大国にすると声明した。

プラン・メヒコは総数2,000件の国内投資案件に国内外から総額2,770億ドルの投資を期待する。投資分野は繊維・自動車・製薬・航空宇宙・農工品・電動車などの重要産業部門だ。今後、各州政府が案件の具体化をすすめる、競争力の確保を主眼に、地域開発の促進、適正賃金を得る雇用の創出、国内生産増による輸入の削減および国内外への供給の増加を目標として事業化する。

米国のトランプ2.0政権の発足を前に、シェインバウム大統領はUSMCA(T-MEC:米墨加三国協定)の維持と強化、さらには北米3カ国が協調する重要性を訴えた。

#### プラン・メヒコの13大目標(2025~2030年)

- ・世界GDPランクを現行12位から10位に引き上げ
- ・生産投資をGDP比25%以上に引き上げ
- ・150万人の雇用を(製造業部門で)創出
- ・繊維・履き物・家具・玩具の生産・消費の50%を自給(中国品対策)
- ・国産部品比率を15%に引き上げ(対象戦略部門:自動車・航空宇宙・電子・半導体・医薬・化学品)
- ・公共調達50%は国産品(Buy Mexican)
- ・国産ワクチンの製造増強
- ・投資認可期間を2年半から1年に短縮(投資手続き・要件の簡素化)

- ・専門技術者を(重点産業分野で)毎年15万人養成
- ・事業環境サステナビリティの促進(例:水の安定供給・クリーンエネルギー投資・廃棄物ゼロ)
- ・中小企業の30%に融資供与
- ・外国人旅客受入れ数の世界トップ5入り
- ・貧困と不平等の削減

(出所)大統領府HP。( )は編集部補注。

\*\*\*\*\*

#### シェインバウム大統領への高い期待つづく

シェインバウム大統領は政権100日の評価調査でも70%近辺の高い支持率を得ている。

メキシコのPoligrama社の1月6日実施電話世論調査(1,000人)は、大統領の100日の業績を38%が優秀、30%が良いと評価。うち弱者支援策を70%が、教育政策を64%が、経済政策(インフラ公共工事)を63%が、治安対策を55%が、厚生政策を58%が最善&良いと評価している。他方、15%が良くない、17%が最悪と判定している。(出所:EFE電1月15日付)

一般紙El Universal紙は1月9日付けで、就任100日の大統領の実績を国民の77%が支持と報道した。メキシコの進んでいる方向については、38%がより良い歩みだ、27%が良い歩みだと答えている。

大統領の個人的資質については、十分な統治能力を有し(83%)、正直な指導者であり(79%)、国民関心の共有者である(78%)と認識されている。前任大統領との関係では7割が自主性を持つとみている。

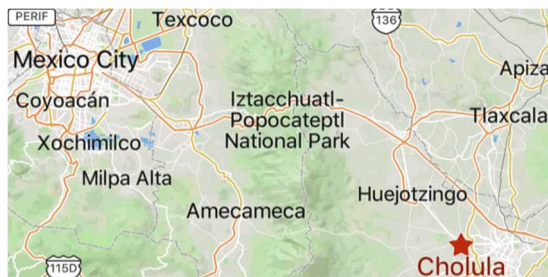
あとがき：恭賀新年。本年もよろしく。先にAMLO政権混乱を予測した米ユーラシア社は、今年のリスク予測第10位に「米墨の対立」を記す。注視したい。ところで敗戦後の民主教育を受けた編集人には国内外の昨今の事態は理解不能。自他のいのちを大事にする価値の復活を祈る。今号は編集人の腰痛初体験で編集作業に遅れ。記事ご寄稿と我こそ編集人！とのお申し出を期待します。[20250115か]

## ぶらりメキシコ人旅 —偽ケツアルコアトル神と古都 Cholula— (Cholula)

メキシコ・日本アミーゴ会 会員  
写真家・ルポライター 阿部修二

### はじめに

休日になるとポポカテペトル山（ポポ）の膝元にある古都 Cholula のピラミッド見学者が静かな町にこぞって押し掛ける。とはいってもプエブラ市近郊のこの町は他の観光地と異なってお金儲けが上手というのではなく、観光客相手の洒落たレストランや土産物屋の数も少ない。巨大ピラミッドの膝元を通る鉄路脇で、時には路線上で列車が減多に通ることなどないのいいことに、堂々と店開きをしている民芸品屋台もある。いかにもメキシコ的。もちろん列車が突如現れるとあわてて店じまいをする。すべてが退屈そうに見える町だが、メキシコの歴史に関心ある人にはたまらない町でもある。



のどかな市場の店先で



大ピラミッド前を横切る線路脇の屋台

### Cholula のケツアルコアトル大ピラミッド

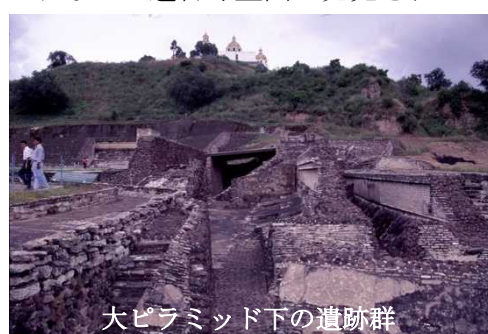
ソカロ（中央広場）から東に2ブロック行ったところに、小高い山がある。木々がすっかり根を下ろしているから山のように見えるが、実はこれは一辺が440メートル、高さ64メートルの巨大ピラミッドで、「ケツアルコアトルのピラミッド」と呼ばれている。その体積は300万立方メートルで、エジプトのギザのピラミッドの2倍の大きさを誇っている。また前回触れたテオティワ坎の「太陽のピラミッド」を凌駕し、それとほぼ同時代のものと言われている。

その南側には近年発掘されたピラミッドの遺構が見られる。一般的に、征服前にすでに小国を形成していた所には、日本の神社さながらピラミッド神殿があったことが知られている。でも征服後に破壊され、ピラミッドの石はキリスト教会や都市整備のために使われた。そのためピラミッド神殿は跡形もなくなるか、あるいは基壇がそのまま教会の台座にされるかして、ほとんど面影を残さないのが倣いである。しかし、ここ Cholula の大ピラミッドだけはちょっと様子が異なる。このピラミッドの西の、放置されたもう一つの小山を見ればその理由がわかる。それは遠目に土砂崩れでむき出しになった土壁のように見えているが、近寄ってみると日干し煉瓦が無数に積み重ねられた人工の壁だとわかる。Cholula の大ピラミッドが完全な破壊から免れ得たのは、日干し煉瓦の巨大構築物だったからだ。もちろんこの日干し煉瓦を覆っていた石は持ち去られ、再利用されたのは前述のごとくである。

Cholula は紀元前300年ごろからの古い町だというが、最初のピラミッドがここに建造されたのは、今から2000年前と考えられている。また、そのピラミッドはバケツを伏せたような形だったらしい。その後、アステカ暦で52年の還暦の度に元のピラミッドを覆うように増築された。この大ピラミッドには発掘のために東西南北に穿たれた通路がある。それによればピラミッドの中には、さまざまな方向に向かう小路と小さな部屋が配置されていて、それらの部屋からはミイラ化した人体や、宝石などの遺物や壁画が発見されたという。



花畑と大ピラミッド



大ピラミッド下の遺跡群



大ピラミッドに穿たれた通路



偶像と犠牲の心臓奉納台=チャックモル(右)



日干し煉瓦で築かれた  
小さな神殿跡



犠牲の心臓を  
取り出す祭壇

### “偽ケツァルコアトル神”

ここで少しだけ、 Cholula の 500 年前の歴史に触れてみよう。この街にスペイン人が初めて現れたのは 1519 年 10 月 14 日のこと。エルナン・コルテス率いる 500 人余のスペイン人と彼らとすでに同盟関係にあったトトナコ軍(メキシコ湾岸の種族)とトラスカーラ軍(今日のトラスカーラ州)の兵士を伴ったことだった。

当時、メキシコでは中央での権力闘争で敗北したケツァルコアトル神が東に去る折りに、「いつしか還暦の年にこの地に舞い戻り、政権を必ず取り戻す」と言明して去ったという伝説が広く信じられていた。トトナコ族からこのケツァルコアトル神の話聞いたコルテスはその伝説の神になりすまし、今日のベラクルス近郊に造った植民地から中央高原に進軍したのだった。

コルテスが現れた 1519 年は奇しくもアステカ暦の還暦に当たる年で、アステカ帝国と強く敵対し、独立を貫いていた小国トラスカーラの盲目の最高指導者シコテンカトルはコルテスをケツァルコアトル神と信じ込み、ついには同盟関係を結んでいる。もし彼が実物のコテスを目にしていたら歴史はちがったものになっていたかも知れないが、黄金狂エルナン・コルテスの奸計には驚くばかりだ。この辺りの話は興味深い、詳細は拙著「メキシコ歴史紀行・コンキスタ・征服の十字架」(明石書店)を参考にされたい。

コルテス軍がトラスカーラに逗留中、アステカ王モクテスマの密使がトラスカーラ族の衣装に身を包みコルテスに接触を試みていた。彼らは黄金の飾り物や豪華な品々を携えて来ていて、小声で「トラスカーラ人はいつ寝返るか分からないので深入りされませんように」と進言し、加えて「この町の南 30 キロに同盟を結んでいる Cholula という大きな町がありますので、そこを訪ねてみることをお勧めします。Cholula 人は皆様のお出でを歓迎しています」と付け加えていた。コルテスはこの密使の言葉と黄金

の進物にモクテスマ王宮への夢を膨らませたのだった。トラスカーラの首長たちは Cholula 国に入ったらどんな策略が待ちうけているかわらないと忠言していたが、コルテスは最早聞く耳を持たず、Cholula 行きを決断していた。

10 月 14 日、スペイン軍が Cholula の入口まで来ると、大勢の領主や首長が出迎えていた。ところがスペイン軍の背後にトラスカーラの大軍とトトナコ軍を従えているのを見て、Cholula の領主は顔を曇らせた。トラスカーラ族とは領土をめぐる争いが絶えず、犬猿の仲にあった。Cholula の領主がトラスカーラ軍の市内駐留を強く拒んだために、しかたなくトラスカーラ軍は外に野営することになったが、その事でコルテスと Cholula の領主は不信感を募らせることに。この進軍には先述の密使も同行していたが、首都から別の使者が送られて来ていた。コルテスとの挨拶もそこそこに先の密使の耳元で何事か小声で話しているのを見て、コルテスは大いに機嫌を損ねることになった。

さらに Cholula 族の態度も急によそよそしくなり、不作を理由に兵糧も渋ってきていた。加えて同行していた先住民通訳マリンチェからモクテスマの陰謀情報を耳にしたコルテスは、すでに打つ手を決めていた。「スペイン軍は明朝、アステカの首都に向かって出発します。Cholula 族の主だった方々にお礼を申し上げたいので、是非、皆様に集まっていただきたい」と Cholula の領主に伝えさせていた。

事件は次の日の朝早くに…。

### Cholula の虐殺

コルテスは全軍を三方が宮殿、残る一方が大ピラミッドで囲まれた広場に集結させると、二つある出入口に楯と太刀を持った歩兵を配置し、そのほかの兵は広場の外側に待機させておいた。馬に跨がったコルテスが広場の一角に陣取った。やがて Cholula の領主や神官たちは別れの言葉を聞くために部下を引き連れて到着していた。広場が一杯になったのを見計らい、コルテスはおもむろに口を開いた。「お前たちの企みはみな、こちらに筒抜けになっている。和平目的で来たスペイン国王の軍隊を、騙し討ちにかけるとは卑劣な行為だ。お前たちは今、その罪の報いを受けなければならない」

その言葉の意味が分からないもののコルテスの強い口調で察したのか、集まった Cholula 人の顔から血の気が引いた。彼らに弁明の口を開く間も与えず、コルテスは通訳の言葉を遮ってすでに攻撃の合図、「サンティアゴ!(突撃!)」と声を張り上げ、銃を空に向けて発射した。それを合図に外に待機していたスペイン軍が広場になだれ込み、集まった丸腰の Cholula 人めがけて襲いかかった。キリスト教徒たちの太刀が容赦なく褐色の異教徒に振り下ろされていた。その傷口から自分たちと同じ赤い血が吹き出たが、それに気を止めるスペイン兵士などいなかった。瞬間に大ピラミッドの前に死体のピラミッドが築き上げられ、そこは血の湧き出る泉となり、

赤い川が下り勾配を求めて流れだしていた。この惨劇が終わるのにそれほどの時間がかからなかった。

町外待機していたトラスカラ軍がなだれ込んで辺り構わず民家に火を放つと、草葺き屋根は炎を巻き上げて燃え広がり、 Cholula の町は火の海となった。決着はその日の内についた。 Cholura 族の主だった領主や神官が殺害されたことを知って Cholura 軍は戦意を失い、 Cortes に服従を誓わされたからである。この戦いで 3000 とも 6000 とも言われる Cholura 族の人命が奪われたのだと言う。



大虐殺のあった広場(ソリア広場)

### ピラミッド上のレメディオス教会

スペイン皇帝カルロス五世宛て書簡で Cortes は、 Cholura の町の印象を「400 の石塔 (ピラミッド) のある都市」と綴っている。その数の多さは、そこを平地にし、その上に都市を建設するという、植民地初期の都市計画を諦めさせるのに十分な理由となった。征服の象徴として先述の「ケツァルコアトルのピラミッド」の上に修道院・教会を建てるべきだったが、残念ながらそれはかなわなかった。平地にするにはあまりにもピラミッドが巨大すぎたからである。

このピラミッド上のレメディオス教会 (Los Remedios : 救済者) は、 Cortes のメキシコ征服の象徴であるかのように言われているが、かなり後年に、それ以前の古い礼拝堂を受け継ぐかたちで建てられたもので、教会前の十字架の台座に記された年号から 1666 年のものと思われる。また、前身の礼拝堂も Cholura にとって重要なものではなく、征服時にはその象徴としての木の十字架が一つあるだけの寂しいものであった。その十字架は二度も雷が落ちて焼ける被害に遭った。

1535 年、3 本目の十字架を立てる際に、近郊の町 ウエホツィングのフランシスコ修道院からモトリニア神父が来て立ち会った。深く穴を掘り進んで行くとスペイン人が悪魔と呼んだ先住民の偶像が続々と顔を出したという。神父は先住民に対して、「ここで多くの罪深い行為が行われていたために、神はご自分の十字架を立てられるのを望まなかったのだ」と言って叱責したという。

でもおかしな話である。ここに十字架を立てられるのを望まなかったのはキリストではなく Cholura の神々であって、神々の怒りを買ったのはスペイン人の行為だったはずである。思慮深くあるべき神父までもが、この時代の混乱に弄ばれていた。

偶像が掘り起こされ、十字架の代わりに鐘が設置された。それ以降、そこに雷が落ちることがなくなったという。それは神のご意志などではなく、たぶんそ

の鐘が避雷針の役目を果たしたのだと想像する。



ピラミッドの上からの現在の Cholura



西北西を向くピラミッド主階段

さて、混乱後の都市建設でソカロを中心にした碁盤の目の様な Cholura になった。先の大ピラミッドの階段が西北西を向いているためか、街路もそれに準ずるように造られている。西北西の先には秀峰ポポではなくその北に位置するイスタクシウアトル山がある。 Cholura 人は、ポポでなく実は後者の山を信仰していたのかもしれない。

これに対してソカロ東のフランシスコ修道院・教会は頑冥に西を向いて立ち上がった。聖歌隊席の明



ポポカテペトル山(左)とイスタクシウアトル山(右)

かり取りのバラ窓以外に装飾のないこの建物は、 Cortes 軍がここで行った蛮行に対する Cholura 人の反抗を強く意識して堅牢な建物となった。それはあの虐殺で多くの領主や神官、そして気力を失った先住民にあてがわれた難攻不落の壁となった。そしてそれを造るように強いられたのは、食糧不足、あるいは疫病ですっかり体力を失った Cholura の先住民だった。当時の先住民の人口減少は人口破壊という文字で表すのに近かった。先の2つの火山は今も Cholura の歴史を黙して語らずにそこにある。



旧フランシスコ教会背景にピラミッド



←カボチャの花(カラバサ)を市場で処理する少女。日常的にスープにて食す。

【連載その 13 完】

【写真転載不可】

【集部注：掲載写真の細部をご覧になるには PC 画面で拡大してお楽しみください。】





♪メキシコ独立を宣言した瞬間を再現し、それに参加した英雄たちの名を叫ぶ伝統儀式「エル・グリート」（独立の叫び）を執り行いました。



オープニングに際しご挨拶をいただきました。（左より）  
 (一社)東京臨海副都心まちづくり協議会 事務局長 中林 久則様/外務省中南米局  
 中米カリブ課 課長 佐藤 慎市様/メキシコ・日本アミーゴ会 会長 河嶋 正之様/  
 日墨交流会事務局 敦賀 公子様/日本ラテンアメリカ文化交流協会 顧問 森 和重  
 /日本ラテンアメリカ文化交流協会 会長 三村 秀次郎

「第23回フィエスタ・メヒカーナ in お台場 Tokyo 2024」は、2024年9月14日～16日の3日間、例年通り東京都港区台場の「お台場デッキ」で開催されました。今年は異常気候ということでフィエスタ当日の天候が心配されましたが、幸い3日間共天候に恵まれ無事開催されました。最初の2日間は好天ではありませんでしたが、強い日差しと湿気でものすごい暑さでした。ステージで演じる方々、飲食や物販ブースの方々、ボランティアの方々、皆さん暑さの中大変ご苦労様でした。余りの暑さにいつもより人出も少ない感じがありましたが、全員頑張ってメキシコを盛り上げました。プエブラ州からも観光をアピールするグループが見えて写真や物産でメキシコの素晴らしさの一端を見せていただきました。

ニュースなどで世界の国々が身近になって来ておりメキシコやラテンアメリカ諸国に関心を持ってくださる方が増えてきていることはとても嬉しく思います。毎年フィエスタを訪れてくださる方も多く、長く続けていることは大切なことだと思います。今後も双方の文化交流に貢献していきたいと願っております。

日本ラテンアメリカ文化交流協会会長 三村 秀次郎



♪お馴染みメヒコ・エン・ラ・ピエルの華麗なメキシコ民族舞踊



♪メキシコ写真コンテスト入賞者表彰式



♪創立 45 年慶應義塾大学公認学生プロレス研究会 ♪ピニャータ割り ♪自慢のメキシコ料理が多数出店 ♪ナタリア D ♪ロベルト杉浦